

草津市立矢倉小学校通信 令和元年7月18日 NO.7



やぐら通信

～ひとみキラキラ豊かな心と体の矢倉っ子～

お手伝いを通して

夏休みが始まる。子どもたちは毎日どのように過ごすだろうか。いつもなら、登校してから下校するまでの間、「仕事」ということではないものの、自分に課せられた勉強があり、学級の係や当番、高学年ともなれば委員会などの活動があるのだが…。

以前、私が3年生の担任だったとき、お手伝い日記を毎週末の宿題にしていたことがあった。保護者にも協力を求め、「どんなかたちでもよいから、一つのことをそれなりにできるようにするまで続けさせてやってほしい。」とお願いした。こちらとしては、「～をしました。はじめに、…。つぎに、…。最後に、…。終わって、～と思いました。」の基本型をもとに、作文上手になれるようにというのがあったからである。さらに、手伝いを続けることで、子どもなりに苦労したり、家族と衝突したりするだろう。その中で、「はたらく」とか「生きる」ということの心模様について思いを巡らせ、言葉にして、家族や家庭、他の誰かの役に立つことのよさを見つけたいしてほしい…そんな願いも込めていた。

多くの子が「ふろそうじ」「食事の用意」「食器洗い」などを話題にし、作業手順を綴り、最後に「ありがとう」とほめられてうれしかったと綴った。しかし、やがて、がんばってやっているのに、「もっといねいにしなさい。」とか、やろうとしているときに、「まだしていないのか。」と言われて言い合いになったことや、お母さんが勝手にやってしまったからできなかったことなどが登場した。作文は学級通信に載せ、家に持ち帰る前に子どもたちと読み合い、同じようなことがあったと苦労話を出し合ったり、どうするといいかアイデアを出し合ったりした。

ねどこの中で A子

もう、みんなねようと言って、ねどこに入った。わたしの横は、ああちゃん(妹)がねている。ああちゃんのむこうは、おかあさんがねている。時計がカチカチいっている。おかあさんが、ひとりごとのように話をしだした。「あしたは天気だし、朝一番に洗たくして、部屋のそうじをして、それがすんだら病院に行って…。」ぼつりぼつりと考えるようなひとりごとだった。「おかあさん、あしたは休みだし、わたしもがんばるよ。」わたしがそう言うと、ああちゃんも、まねして「わたしも、きばってあげる」と言った。ねていても、あしたはあれして、それからあれしてと考えているおかあさんのことを思うと、なんだかすまない気がした。入院しているおじいちゃんのこと、心配しているおかあさんのことを思うと、むねの方が、むく、むくと、あつくなってくる。

当時、子どもたちと読み合った作文の一つだ。「させられる苦労」は、事実以上に大きい苦労と感ぜられ、「する苦労」は事実以上に小さく感ぜられるものだ。ここで考えたいことは、仕事を引き受けた側は、これを「自分ごと」として、言い換えれば仕事に愛をもってつとめるように工夫することである。同時に、任せる側も、単なる労働だけを求めるのではなく、計画から、取り組み、できばえまでの一通りのことに、共に生きる者として、一緒に喜び動けるようにすることが大切ではないかと思えてくる。よい夏休みとなりますように。

校長 大林 道範